御成敗式目證註

全

ワ 3
6906

49-1913

高井蘭山翁講釋

證註

御成敗式目

東都書林　玉巖堂梓

ハ7 3
6906

御成敗式目詳解　自敘

凡官士を主に仕て政治を補農民食を作り出して貴賤と業に工匠官殿城郭より茅屋蓬戸まで造り出して居とあらば商賈を交易利益の國用迄と辨じ。億兆の人種上代より出て天地ふ參ち。無爲の化育を施し。死を化賊に殺ふ衆生に安堵を得。孟子に云人を治る者人

ろ
116(1)

和人と治るい唯壹人りて成敗萬機を結れ
勞しまふ。耕業の力と勞をるに堪るし。往時不審時
国刑ふ議して政勢の移と変む。是を以て太平治る餘
年。殿后時〻無ふ郡　変化あって。貴国を替れしも。大綱を
千萬年に易るべらず。於是詳解を述て兒童に示す云
文政戊子春分

高井蘭山著

御成敗式目
詳解

御成敗式目詳解

東武　高井蘭山著

世と和しめ
愚昧とする事。善事とする者ハ成就し
一名と成敗とも云ハ
ハ世式とハ法度目也。編集実録の
法と目録と云ハ
と俗ひ字
天下と平に治る也

一可修理神社專祭祀事

一可修理神社專祭祀事

日本ハ神國なれバ第一お神を敬ふ事と出す法注の
しろふ修理とは時〻の事と意ふ。祝祭也。

右神者依人之敬增威人者依神之德添運

然則恒例之祭祀不致陵夷如在之礼莫令怠慢

右神者依人之敬增威人者依神之德添運

右とい神社の条ときそえ人の崇め敬われの〻〻神の威勢もてくるる。人はまた神徳利生ありて運もひらくべし

然則恒例之祭祀不致陵夷如在之礼莫令怠慢

然れば恒例之祭祀陵夷ざるべき礼奠を神のごとうやまい慎むべし。怠慢なる事

因茲於関東御分國ヒ并庄園者地頭神主等各存其趣可致精誠也

兼又致有封社主代代

因茲於関東御分國〻并庄園者地頭神主等各存其趣可致精誠也

兼又致有封社主代代

社者任代と
符小破之時
且加修理若
及大破言上
子細隨其左
右可有其沙
汰矣

符小破之時且加修理若
及大破言上子細隨其左
右可有其沙汰矣

一可修造寺塔勧行佛事
等事

一可修造寺塔勧行佛事

右寺社雖異
崇敬惟同仍
修造之功恒
例勧進先
條莫招後勧

右寺社雖異崇敬惟同仍
修造之功恒例勧進先
條莫招後勧

寺と社とハ神と仏の異なりとも崇敬ハ同しくして
破壊と修造の功恒例の勧進ハ先
條といまゝ神社と雖ども仏法に準ずべく後
勧へハ法あるごとく沙汰ハ有まじくそ後文にハ沙汰の

但恣貪寺用
於不勤其役
之輩者早可
令改易役職
矣

一諸國守護
人奉行事

右右大將家

法と謂ふべし。條々如とくとい

但恣貪寺用お不勤之役
之輩者早可令改易役職
矣

一諸國守護人奉行事

右右大將家御時所定置者大番催促謀叛殺害人付夜討強盜山賊海賊等事也

御時所被定
置者。大番催
促謀叛殺害
人付夜討強盜
山賊海賊
等事也

而至近年者
分補代官於
郡鄉。宛課公

而至近年者分補代官於
郡々宛課公事お庄保地

事於庄保。非國司而妨國務。非地頭而貪地利。所行之企甚以無道也

國司而妨國務。非地頭而貪地利。所行之企甚以無道也

代官ハ下司と己が代小半とわしむるを云。是と大概やするとて補すといふ。諸郡諸郷の年貢を課役せしめ。国の司よりもなくて農業国の務を妨げ。地頭もおく地よりよる利潤を貪る濫人の沙汰すべきことハ。前條のごとく宜しからずしと。近来猥りなるを。国司の年貢地頭の所務を奪ひ取る行跡の企とするすと云々。是を渡しする者すべてのことと なすべからずと戒るなり

押雖為重代御家人無當

押雖為重代御家人無當

時之所帯者不能駈催。兼又所々下司庄官以下。假其名於御家人對捍國司領家下知云々。如然之輩可勤守護所役之由。縦雖望申。一切不

時之所帯者不能駈催

たとひ譜代重恩の臣なりとも今ハ知行不帯もるも力なきのものハ大事に催促もさすも。當濃人の沙汰といふべし

兼又所々下司庄官以下假其名於御家人對捍國司領家下知云々如然之輩可勤守護所役之由縦雖望申一切不可加催

ある所の下司庄官なども御家人の名を假て。国司領家の下知に對捍て用ひざる族たとひ大事役儀勤べき

可加催

早任大将家御時例大番役并謀叛殺害之外可令停止守護之沙汰

若背此式目相交自餘事者或依國司

領家之訴詔或就地頭土民愁歎非法之至為顯然者被改所帯之職可補穏便之輩也又至代官可定一人也

一同守護人

一同守護人不申交由沒

一切停止すべし。一切停止すべしとの事なり。

対捍ハ敵対とぞ〻〻

先例のごとく大番の催促及び強盗人殺害人と召禁ずべき事。

若背此式目相交自餘事者或依國司

領家之訴詔或就地頭土民愁歎非法之至為顯然者被改所帯之職可補穏便之輩也又至代官可定一人也

自餘ハその事とそ定の事といふよりハ思つゝ所の事なり。

領家の訴ハ地頭ハ悪支の輩〻〻る輩といづれも所生るとあり。

地頭の非法ハ所帯の職と云ふ

横領する人とも代官と云ふ

きハ私敵ハ代官ハ人を定らるべきこと

云ふの古来ハ地と所帯とを武功に依て一国のえらび人

一同守護人不申交由沒

不申支由没
收罪科跡事

右重犯之輩
出来時者須
申子細随左
右之處不決
實否不糺輕
重恣称罪科
之跡私令没
収之條理不
盡之沙汰甚
自由之斟謀
也早注進其
旨宜令蒙裁
断猶以逮犯
者可被処罪
科

次犯科人田
畠在家并妻
子資財事

收罪科跡事

もし復人とさむらひ罪科と犯し申刑とあて事の子細
ともとかくの沙汰と没収するとうたがひすること

右重犯之輩家宅財産須
申子細随左右之處不決
實否不糺輕重恣称罪科
之跡私令没収之條理不
盡之沙汰甚也早注進其
旨宜令裁

断猶以逮犯者可被処罪科

係数と全てんと数するあと罪と犯すなあらばそれ子細と
つぶさまやとうかの沙汰ちよ復のべきさまを後ろ実ら否の変
定もせず罪の軽さ重さも糺明とたげすりつかまつる科人の
欺りとて糺明をあすハ理とをさず家もの仕形をなつぐ
自重斟さ係ろう。もし復人ハ先まず一生涯の罪と復一紙を上
の裁ひと為ろて罪と科べ。犯ハ復と事ひ犯さばもし復の
処法と糺し。罪ヨ沙汰べきぞといまりあるまり

次犯科人田畠在家并妻子資財事

於重科輩者
雖召渡守護
所到田宅妻
子雜具者不
及付渡

兼又同類事
緩雖載白状
無財物者更
非沙汰限

科と犯したる人の和指ちゝ田畠を家妻子資具材宝などゆゆしと家の次にたゝへ資ハすると例日用の乃具とゝ

於重科輩者雖召渡守護所到田宅妻子雜具者不及付渡

兼又同類事緩雖載白状無財物者更非沙汰限

科とゝ犯したる人の和指ちゝ田畠を家妻子資具材宝などゆゆしと家の次にたゝへ資ハすると例日用の乃具とゝ

乃具とハ何とゝ云ハ大ゝ渡ハ

一諸國地頭
令抑留年貢
所當事

右抑留年貢
之由有本所
之訴訟者即
遂結解可請

一諸國地頭令抑留年貢所當事

右抑留年貢之由有本所之訴訟者即遂結解可請

所宜ゝ依て斗ハ白ハまうす状ハ云ハ因人の中に書なゝすると白状ハ載ると云白状ハ状中状と云ハゝと因人の中にゝ

と白状ハ載ると云ハ大ゝ渡ハ

寸田ゝ年貢ハ渡ハ出すと云ハ年貢ハ和南と云ハ年貢ハ和南と抑留と云ハ後世ハ私ハ云ハ年貢ハ地乃ハ云ハ

右抑留年貢之由有本所之訴訟者即遂結解可請

勘定犯用之
条若無所道
者任員數可
辯償之

但於為少分

者早速可致
沙汰到過分
者三箇年中
可辯濟也猶
背此旨令難
澁者可被改
所職也

一國司領家
成敗不及關
東御口入事

右但負數可辯償之

法金の時代より大名十万貫と限るべし。それ以下の家とも本所ともに
称。そもそも地頭とは本所への年貢とり負ひ。しつひに本所をとり
のけ、代官に地頭本所への年貢とり負ひ。しつひに本所をとり
ものゝ結解はあるべしと。其用すること。勿論とい未だ地頭と勿論
定ること。地頭年貢と抑留すべし。本所より沙汰あるべき本所
の代官と地頭と兼用すべし。そもそも勿論地頭の[illegible]負
ちくのごとく取るべし。そもそも負数と多く償はざるべしとくに時代の
代官は既多の名代より地頭とは後じ半と斗ものゝ大名[illegible]
二十万貫と限るべし。年貢は本所の必ず[illegible]
当後ぜ[illegible]むべし。代官は[illegible]
を[illegible]と[illegible]後代[illegible]
[illegible]れ[illegible]の[illegible]地と[illegible]代官[illegible]本所の法金を
[illegible]治め民と[illegible]ず後世とは大[illegible]

但於為少分者早速可致沙汰到過分者三箇年中可辯濟也猶背此旨令難澁者可被改所職也

[illegible]負[illegible]三箇年中
三年の間[illegible]毎[illegible]
[illegible]地頭職と[illegible]

一國司領家成敗不及關東御口入事

国司は[illegible]
[illegible]成敗は始ふも云[illegible]
[illegible]

右國衙庄園
神社佛寺為
本所進止於
沙汰來者今
更不及御口
入若雖有申
旨敢不能叙
用

右國衙庄園神社佛寺為
本所進止於沙汰來者今
更不及御口入若雖有申
旨敢不能叙用

次不帯本所
挙状致越訴
事

次不帯本所挙状致越訴
事

諸國庄園并
神社佛寺領
以本所挙状
可經訴訟之

諸國庄園并神社佛寺領
以本所挙状可經訴訟之

虚不帯其状
者既背道理
欲自今以後
不及成敗

一右大将家
以後代と将
軍并二位殿
御時所宛給
所領等依本
主訴訟被改
補否事

右或募勲功
之賞或依官
仕之労拝領
之事非無由
緒

而稱先祖之

虚不帯其状者既背道理欲自今以後不及成敗

一右大将家以後代と将軍并二位殿御時所宛給所領等依本主訴訟被改補否事

右或募勲功之賞或依官仕之労拝領之事非無由緒

而稱先祖之

本領於蒙裁許者一人雖開喜悦之冒傍輩定難成安堵之思歟濫訴之輩可被停止

但當時給人有罪科之時水主守其次

許之一人雖開喜悦之冒傍輩定難成安堵之思歟濫訴之輩可被停止

但當時給人有罪科之時水主守其次

企訴訟事不能禁制歟

次代ヒ御成敗畢後擬申乱事

依無其理被弁置之輩歴歳月之後企

企訴訟事不能禁制歟

次代ヒ御成敗畢後擬申乱事

依無其理被弁置之輩歴歳月之後企

訴訟之条存知之旨罪科不輕自今以後不顧代々之御成敗猥致面々之盤訴者須以不實之子細被書載所帶之證文

一雖帶御下文不令知行經年序所領之事

右當知行之後過二十箇年者任右大將家之例不論理非不能

載て後世に傳へしむべし此所帶の御文と云知行とは云ふ時
傳り大田まる孫に傳へ之きもの書ものとそこ

一雖帶御下文不令知行經年序所領之事

此所帶の文と云ふ知行とは云ふ時の御文と為知行の事
の御文と為知行のすべて年紀とつゞくこと也
為て為ても入ず知行の事

右當知行之後過二十箇年者任右大將家之例不論理非不能

改替

而申知行之
由掠給御下
文輩雖帶彼
状不及叙用

一謀叛人支

右式目之趣
兼日難定欲
且任先例且

今知行する所二十年来とるべきうたがはしきの時分の例なり

而申知行之由掠給御下
文輩雖帶彼状不及叙用

一謀叛人支

謀叛人とは天下をくつがへさんとくわだてうるを云

右式目之趣兼日難定欲
且任先例且依時儀可被
行之

依時儀可被行之

兼日といふはてすると云日四実は兼は事のとよりてすると云ふる字義なれども謀の義を偏うまうすこと叛人
ハ一大事のことなれば罪の行ひうさまざまなり武用と云べき
なれば先づこの例と思ひ又は例の儀ならしとがひて行ふべし
なり儀は宜と同じ大学に儀賢殷とあるこれを知べし

一殺害刃傷
罪科事

一殺害刃傷罪科事

人殺害と刃とをそれ人を傷罪科のこと

右或依當座
之諍論或依
遊宴之醉狂

右或依當座之諍論或依
遊宴之醉狂不義之外若

不慮之外若犯殺害者其身被行死罪并被處遠流帶其父其子雖被没收所不相交者互不可懸之

犯殺害者身被行死罪并被處遠流帶其父其子雖被没收所不相交者互不可懸之

あるいハ当座の禅編御のくるまおころ。拾裏酒宴の解犯もしくハ他人を殺害し。後悔もせんるく。意さ科に依て当人ハ死罪又ハ流罪に処され知ぬ没収せらるといへども其ほかの父母ハ一切まきまれず其ほかの科と知べからざるハ除て不意のあとあるかの字ハ方切りてとらるる不意にて出たのあとと加つるごとし

如後世よハ子の知父ハ父ハ子らずといへども父の咎ハ子ハ刑人のふハ逃づべからずとなり

次刃傷科事同可准之

次或子或孫於殺害父祖之敵父祖縱雖不相知可被處其罪為散父祖之憤忽遂宿意之故也

次刃傷科事同可准之

刃傷とハ刃物ハ白刃と撞て人を傷ハ落ものもまたくハ源もまて つひに死るもあるべし殺害の科に准へ分別せまと

或子或孫於殺害父祖之敵父祖縱雖不知可被處其罪為散父祖之憤忽遂宿意之故也

てい敵とハ父祖つねに怨敵のもとひに恩ひあるを孫のけをと月々怨ちに対ハ父祖さらはさるとと知ずとも父祖の恩ハ恩を殺害をと上ハ科と再べらずとハ雖ども恩を殺害とハ科と

次其子若欲奪人之所職若為取人之財寶雖企殺害其父不知之由在状分明者不可處縁坐

一依夫罪科妻女所領被没收否事

次其子若欲奪人之所職若為取人之財寶雖企殺害其父不知之由在状分明者不可處縁坐

一依夫罪科妻女取領被没收否事

右於謀叛殺害并山賊海賊夜討強盜等重科者可懸夫咎也但依當座口論若及刃傷殺害者不可懸之

右於謀叛殺害并山賊海賊夜討強盜等重科者可懸夫咎也但依當座口論若及刃傷殺害者不可懸之

罪科につきとる妻女の取領は女房たちに別に取りのこまの罪まもってこれも没収とそこらすべきさぶの事也

謀叛殺害山賊海賊夜討強盜のことは第三巻に出でたり。
此条は一切に女のくるべきことにあらず知ぬることなり

一惡口咎事

右鬪殺之基起自惡口其重者被處流罪其軽者可被召籠也

問注之時此

惡口則可被付論所於敵人

又論所之事無其理者可被没收他所領若無所帶者可處流罪也

らず。例よりは強るどこうの人と過るうどい惡女といへども知きこと不なり。まつて咎めと拙きこと

一惡口咎事

右鬪殺之基起自惡口其重者被處流罪其軽者可被召籠也

人と殘り罵り嘲しり辱すひろと惡口とこと。其咎こと

問注之時此惡口則可被付論所於敵人

鬪殺とはいろひとりて人と殺すと云。召籠とは宅に押籠。又は牢舍ともいふ

付論所於敵人

云牢所とは双方のうちにと同れ〳〵。敵人と寄人と論人。射変の時。惡口云論所とは今互に牢へ所へ敵人と論人

いとやうけばと惡こと不敬に係て。論所と惡口せこれ

ろうにんなれしてあるもんと惱ふこと字ろう

又論所之事無其理者可被没收他所領若無所帶者可處流罪也

論ずるあのこと理なきこと

ろうべし。例れば惡口の咎に係ておのうちろう知りと

ばとらうべし。無所帶とは知

りもの

一毆人咎事

毆とハ杖棒と物てんとうちくくゝを云

右被打擲之輩為雪其恥定露害心故毆人之科甚不輕仍於待者可被没收所須無所帯者可處流罪至郎従以下者可令召禁其身也

一毆人咎事

右被打擲之輩為雪其恥定露害心故毆人之科云以不輕仍於侍者可被没收所須無所帯者可處流罪至郎従以下者可令召禁其身也

一代官罪科懸主人否事

右代官之輩有殺害以下重科之時件之主人召進其身不可懸

一代官罪科懸主人否事

右代官之輩有殺害以下重科之時件之主人召進其身不可懸

打擲されるとハ恥辱と云ふ事なり殺害とハ人を殺すことなり

科とハ罪なり

仍て侍の知行を身ゆえ人と打擲せば知行を召放さるべし

従者とハ家来を申す事なり

云ふ中間抔なり

代官とハ領主の名代なり

國々の地頭の代官なり

科とハ罪なり

科

但為扶代官無咎之由主人陳申之処實犯露顕者難遁其罪仍可被没收所領至彼代官者可被召禁也

科と犯すとは人を捕へ殺すこと

但為扶代官無咎之由主人陳申之処實犯露顕者難遁其罪仍可被没收所領至彼代官者可被召禁也

代官とは領主の人を扶持する者。実犯露顕のとは主人が罪科と云ふこと

犯すとは罪科に成る事柄のことを犯すと云ふ

科とかはんとは罪のことをとがと云ふ

兼又代官或抑留本所之年貢或違背先例之率法者雖為代官之所行主人可懸其科也

加之代官若依本所之訴詔若就訴人

兼又代官或抑留本所之年貢或違背先例之率法者雖為代官之所行主人可懸其科也

率法とは正しき法式の年貢と抑留して引負しまたは先例仕来りの法式と違背すること。代官は主人も同じ罪なれば科とのすべし

加之代官若依本所之訴詔若就訴人解状自関東

解状自関東
被召之自六
波羅被催之
時不遂参決
猶令張行者
同又可被召
主人所帯但
随事躰可有
軽重歟

之旨自関東六波羅被催之時不遂参決猶令張行者同又可被召主人所帯但随事躰可有軽重歟

かやうにしのこゑをすきずるもあり解状とハ今の目安也但し支配の目安と見ぬて目安と云事なれバとぞ本所の所領の納人の目安にやしたる私の異居と紀明せんとて何時も時遂にあかりも締めもせで宅に居所も手奉と法ハ公と越ざる也ちなみに上に同じく主人の所領も召上らるべし其の極務にしるして理非を定むるのは其身のあるべしとぞ六波羅とハ須貪武将の代官大名頭人にて六波羅の役所にて諸て禁庭をも護し並て公事を裁判す依て斯くの名ある

まて諸奉行人も京六波羅へも召出し事を決せしむ

一某書罪科
事
右於侍者可
被没収所領
若無所帯者
可被處遠流
也凡下之輩
者可被擦火
印於其面也。

一謀書罪科事

謀書とハ似せ書をなして人をくるしむるを罪科と云

右於侍者可被没収所領若無所帯者可被処遠流也凡下之輩者可被擦火印於其面也執筆者又与同罪也此論人所帯之

執筆者又與同罪次以論人所帯之證文為謀書之由多以称之披見之處若為謀書者尤任先條可有其科又無文書之紕繆者仰謀略之輩可被付神社佛寺之修理但到無力之輩者可被追放其身也

文為謀書之由多以称之披見之處若為謀書者尤任先條可有其科又無文書之紕繆者仰謀略之輩可被付神社佛寺之修理但到無力之輩者可被追放其身也

修の料にまで謀書せん。紕繆と申ハ書誤りのきずハ愆流せらるべし。凡下ハいやしきものと云。其色に随て裁可と據

べし。據の字ハいく度もまりかすん。文書と備れて書るをいふ。同罪とハ執筆人より論人が持ちる證文ハ謀書なりとはかまこれと披見るに文書にてしかべし先の條にいふごとくの科なり。謀書ならず文書の紕繆あらば謀人の中據なる所の償に身の不限に應じて堂の料とおさせ寺社修理の用に充べし。出す力もなきハ追放して其所を追退るよりつかせかしき也

一 兼久兵乱時没收地事

一 兼久兵乱時没收地事

八十二代の帝を後鳥羽院と申。八十三代の帝を土御門院と申ハ後鳥羽院の皇子なり。八十四代の帝を順徳院と申。土御門院の御弟なり。承久三年巳五月後鳥羽院兵を催して執権北條義時を追討せんとし給ふ。是ハ執権の威を逞して天子を蔑にし武将を軽じ義時我意の栄耀のふるまひ天下のこと

一去年五月の比より世の中騒動す。諸国の武士
泰時時房と大将軍として東海道へ下る。宇治勢多の合戦皮軍毎度打勝て
戰し。同十四日宇治勢多の合戦皮軍毎度打勝て
同十五日京都へ攻入る。宿所を焼て
と。七月十二日伯父へ流し。北條殿と仰せ
ちゆ門殿と云ひ。遠流に迫し。右京殿の御孫と云て即位あり。
八十四代後堀河院と申。此帝方へ心を寄せし諸方
皆悉くこれ没収せられしかば。野に屍を晒す。
乱と云ひ。三代の帝と申すは。
変也。此没収せられし所の事と申す際也

右致京方合戰之由依聞食及被没收所帶之輩無其過之旨證拠分明者宛給其替於當給人可返給本主也是則於當給人者有勲功之奉公之故也

次關東御恩輩中交京方之合戰事罪

右致京方合戰之由依聞食及被没收所帶之輩無其過之旨證拠分明者宛給其替於當給人可返給本主也是則於當給人者有勲功之奉公之故也

次關東御恩輩中交京方之合戰事罪科軽重仍即

科殊重仍即被誅其身被没収所帯畢而依自然之運道来之族近年及聞食者綟已遠期之上尤就寛宥之儀割所領内可被没收五分一但御家人之外

下司庄官之輩京方之咎緩雖露顕今更不能改沙汰之由去年被議定畢者不及異儀

次以同没收之地稱本領主訴申事當知行之人依

有其科没收之。宛給勲功之輩畢。而彼時知行者非分之領主也理可返給之由訴申之類多有其聞。既就彼時知行普被没收畢。何關當時之領主可尋往代之由緒哉。自今以後可停止濫望矣

一同時合戰罪科父子各別事

右父者雖交京方其子候關東。子者雖

有其科没收之宛給勲功之輩畢而彼時知行者非分之領主也理可返給之由訴申之類多有其聞既就彼時知行普被没收畢何關當時之領主可尋往代之由緒哉自今以後可停止濫望矣

承久の乱よりおけられし地を追て勲功ある輩へ下し給れるを其の領主ありしかれと知行する輩多しと聞けれども彼乱の時の領主ハ科ありて没収せられし所なれバ取返さるべきいはれなし何ぞ当時の領主を捨て往代の由緒を尋られん自今以後濫望の望と申出ることハ停止すべしとなり

一同時合戰罪科父子各別事

承久の時の成敗親子なりとも其科各別なるべしと云

右父者雖交京方其子候關東子者雖交京方其父

交京方其父候關東之輩。賞罰已異罪科何混

一 西國住人等雖爲父雖爲子一人參京方者住國之父子不可遁其咎。雖不同道依令同心也但行程境遥音信難通共不知子細者互難被處罪科歟

一 讓與所領於女子後依有不和儀其

候關東之輩賞罰已異罪科何混

京方どるすん致され関東に候ずるハ恩賞あり。忠にき親子といへどもめぐのごとくなれバ罪科も又かハるなり殊らしく混ずまじ

一西國住人等雖爲父雖爲子一人參京方者住國之父子不可遁其咎雖不同道依令同心也但行程境遥音信難通共不知子細者互難被處罪科歟

住人とハ諸侯ハ別してさき武士之小身の者をいふ住人とハ申さるゝ其国に住ものハ皆住人と也然るに鎌倉へ之駿河の住人某甲三郎なと諸侯まも某々と云人之端式のごとし。然るの者ハ父子も子も一人京方へ参るらバ其ほか諸る親子ハ兵糧とのかくゞさず京へのぼらずといへども心ハ合する故に地の程境もあまで音信もとゞかざる互に事の子細をしらざる事ハ罪せられざること事なり

一讓與所領於女子後依有不和儀其親悔返否事

親悔返否事

右男女之号雖異父母之恩惟同法家之倫雖有甲吉女子則憑不悔返之文不可憚不孝之罪業父母亦察及敵對之論不可讓所領於女子歟

右男女之号雖異父母之恩惟同法家之倫雖有甲吉女子則憑不悔返之文不可憚不孝之罪業父母亦察及敵對之論不可讓所領於女子歟

親子義絶之起也既教令違犯之基也女子若有向背之儀者父母応任進退之意依之女子者為全讓状竭至孝之

親子義絶之起也既教令違犯之基也女子若有向背之儀者父母応任進退之意依之女子者為全讓状竭至孝之

節父母者為
施撫育均慈
愛之思者欤

我子弟と遣ひ業と捨ことの起我の教へと我ハ遠
のく業之ハ我の業を近ま他で悔返すべし向背へ
我の作ま任せんてくびいきもくと云任ハ義理とか背ハ
戒め呵り我の心他でよ業を近すべしとんの わらん慮ま
るる西洋とるるへさ教れんことと思れ慮ハと金ハ
者の心極と切ひ我ハ接育義理のよい場の設くこ場うえ
るり。け時代ハ君を移る和漢の用とと為て如のいる石
ち業すれ良女の知めとえことあり業とハ元るへさぬ云
も奴るさるれ子。父母の恩ハ義ハ男も女も同し我るこ
男ふハ義務とつさばる孫ともはべし女るハ山とるま
遠人ま任せ、のまれば疑別でるこもあり親族世の
間ハともあれるくもあれ兄弟の世とるりて第る不用
まわんと業しく業してのひるれば業この義務より世
兄弟の世まもうても我より女るへ分るる知ハいろるぬ
るく家りるハ我の業恩と金ハでしめんと隆世まん農
高まハ田地町金ま と如まま分るこわれるも我ハま

一不論親疎
被養養輩遠
背本主子孫
事

右憑人之輩。
被親愛者如
子息。不然又
如郎従欤爰

於ては如の人ありと為ハ吹挙と事とするる。如ハ吹挙と事とするる
るる知りの家あれば男ハ男女とも養ハ偽り吹挙
の人と考ふべ。れば養孫ありて主男ま考こまとも偽り吹挙
せるるま考りめりのるれば主男ま考ふ。風家ハ
偽り吹挙と吹とるる

一不論親疎養養輩遠
背本主子孫事

我ハ不考りて我被他人ま養養れるる
のとと云本主ま人已とりるるる遠背くとを

右憑人之輩被親愛者如
子息不然又如郎従欤爰
於輩令被養養時本主

彼輩令致忠勤之時本主感歎其志之餘或渡宛文或與讓状之処称和与之物對論本主子孫之條結構之趣甚不可然

感歎其志之餘或渡宛文或與讓状之処称和与之物對論本主子孫之條結構之趣甚不可然

人は爲て其主を親愛するものハ主君同前なるべし其の子息のごとく。身をもまかす家来のごとし。此志節折て勤る者の志を感じ宛文讓状と与へ是ハ私の所領の内何配割つかハすべくと与ふる所を何方何ケ所を書面とつかハすと宛文と云。讓状又同じ。和与没後ハ本主の子孫に對し我が所領ハ和与の物なれバ本主の恩を知りて同前に見るべし。對論せんとする事を結び構ふる條。一時ハ恩を報と知て仕形を物ならず合点してもむなしく和

求媚之時者且存子息之儀且致郎従之礼向背之後者或假他人之号或成敵對之思忽忘先人之恩顧

違背本主之子孫者於得

さてまうと和与とを云

求媚之時者且存子息之儀且致郎従之礼向背之後者或假他人之号或成敵對之思忽忘先人之恩顧

氣まゝにして媚へつらふ時ハ子の礼をまつろひ且ハ家従が主人へつゝしむ礼をいたし。のちに向背他人への名字と更へ他人の名を假て先人本主の恩を顧ずうけたるを忘れし。恩を仇にして敵する人の心をなすわざ

違背本主之子孫者於得

譲之所領者可被付本主之子孫矣

一得譲状後其子先于父母令死去跡事

右其子雖令見存到令悔返者有何妨

哉況子孫死去之後者只可任父祖之意也

一妻妾得夫譲被離別後領知彼所領否事

右其妻依有重科於被弃捐者毀雖有

往日之契状難知行前夫之所領

又彼妻有功無過賞新弃舊者所讓之所領不能悔還

一父母所須配分之時雖非義絶不讓

妻幸労の功とつゝまるきよりて女と電光のあり
まて毎ゝるるゞい家と物置ゞてきまり

父母所須と配分之時中を達るるるきと成人の
ふまる儀与ざるの事のことなり

與成人之子息事

右其親以成人之子令吹舉之間勵勤厚之思積勞功之処或就繼母之絶言或依庶子鍾愛其子雖不被義絶忽漏

彼處分佐際之條非據之至也

仍割分所立之嫡子分以五分一可宛給無足之兄也但雖為少分於斗宛者不論嫡庶陸

依證跡抑雖為嫡子無指奉公又於不孝之輩者非沙汰限

一女人養子事

右如法意者雖不許之右大將家御時

以来到于當世無其子之女人等譲与所領於養子事不易之法不可勝斗加之都鄙之例先蹤惟多評議之處尤足信用歟

世をこと女人ハ譲与所領於養子事不易之法不可勝斗加之都鄙之例先蹤惟多評議之處尤足信用歟

一譲得夫所領後家令改嫁事

右為後家之輩譲得夫所領者須抱他事訪夫之後世之處背式目事非無其咎歟而忽忘貞心令改嫁

一譲得夫所領後家令改嫁事

右為後家之輩譲得夫所領者須抱他事訪夫之後世之處背式目事非無其咎歟而忽忘貞心令改嫁

者。以所得之領知。可宛給
亡夫之子息。
若又無子息
者。可有別御
計

一 関東御家
人ど月郷雲
客為聟君。依
讓所領公事
之足減少事

右於所領者
讓彼女子雖
令各別至公
事者随其分
限可被省宛
也

親父存日緩
成優恕之儀
雖不宛課逝

去後者尤可
令催勤

若募権威不
勤仕者永可
被辞退件所
領欲凡雖為
関東祇候之
女房敢勿泥
殿中平均之
公事此上猶

令難澁者不
可知行所領

一譲所領於
子息給安堵
御下文之後
悔還其領譲
與他子息事

右可任父母
之意之由具

載先條畢。
仍就先判之
讓雖給安堵
御下文其親
悔返之於讓
他子息者任
後判之讓可
有御成敗

一未處分跡事

右且随奉公
之淺深且紀
器量之堪否
各任時宜可
被分宛

一構虛言致
讒訴事

右和面巧言

掠君損人之
屬文籍所載
其罪甚重爲
世爲人不可
不誡爲望所
領企謗訴者
以謗者之所
須可宛給他
人無所帶者
可處遠流又
爲寒官遠搆
謗言者永不
可召仕彼謗
人

一閣本奉行
人附別人企
訴訟事
右閣本奉行
人更附別人
内ヒ企訴訟

之間奏差之沙汰不慮而出来欤依於訴人者暫可被抑裁許至執申人者可有御禁制奉行人若令緩怠空経二十箇日者於庭中可申之

一遂問注輩不相待御成敗執進権門書状事

右預裁許者恍強縁之力被弃置者愁権門威

爰得理之方人者。頻称扶持之芳恩。無理方人者。竊猜憲法之裁断。黷政道職而斯由。自今以後。慥可停止也。或付奉行人。或於庭

中可令申之

一依無道理不蒙裁許之輩。為奉行人偏頗之由訴申事

爰得理之方人者。頻称扶持之芳恩。無理方人者。竊猜憲法之裁断。黷政道職而斯由。自今以後。慥可停止也。或付奉行人。或於庭中可令申之

一依無道理不蒙裁許之輩。為奉行人偏頗之由訴申事

負くる方人は政所の憲法を犯して裁断を竊む。天下の政所は御もひいきこんそるく憲法かも形曲げ。猜べき理あり負べき理をして形曲るとかる事偏あらば政所と汚黷ものかと。後世弥怪しの口入と訴むべし

一依無道理不蒙裁許之輩為奉行人偏頗之由訴申事

厳しく停止をかけ人を消さるべし。庭中

負くる方人は。又裁判の理を加勝一せと免と為るべい裁許。ならめるすと。所の理を叶ざるの人をとすきと奉の偏頗依怙の為して作なる業の事あり

右依無其理不関裁許之輩為奉行人偏頗之由構申之條太以濫吹也自今以後構出不實企濫訴者可被没公所須三分一無所帯者可被追却

若又奉行人有其誤者永不可被召仕

一隠置盗賊悪党於所須内事

右件輩雖有風聞依不露

顯不能斷罪不加炳誡而國人等差申之處召上之時者其國無為也在國之時者其國狼藉也云々

仍於緣邊之凶賊者付證跡可召禁

又地頭等到隱置賊徒者可為同罪也先就嫌疑之趣召置地頭於鎌倉彼國不落居之間者不可給身暇

緣邊に悪党入れ置くことあるよしそれ仍跡あるよし付て召置べきこと

又地頭等到隱置賊徒者可為同罪也先就嫌疑之趣召置地頭於鎌倉彼國不落居之間者不可給身暇

地頭として賊の徒と隱置べきこと同罪たるべきこと地頭は嫌疑の趣召置べきこと彼國に不落居之間者不可給身暇

地頭は知らざりしや所の嫌疑もあらば免されず。実は地頭は知らざりしや。所の嫌疑もあらば免されず。実は地頭は知らざりしや。賊徒あらばと思はば知らざりしや。

仲間と書て改められ、年々に記録されるなり

次被停止守護使入部所事同悪党等出来之時者不日可召渡守護所也若於拘惜者旦令入部守護使旦可被改補地頭代

也若又不改代官者被没収地頭職可被入守護使

一強竊二盗罪科支付故火人事

右既有断罪之先例何及

試案に曰、護所人とそもそもいろう事とできるなり。古紙のホゴ所出来べきなく捕へも護所人なら没すべし。若拘惜ならば旦護所人といえず。当後使と入れ盗紙案数でもべし。其の地頭代と改べし。地頭なり改ずんば地頭と云故し当護と其ホゴ入るなり

一強竊二盗罪科支付故火人事

強盗ハ推入るゝと云竊盗とハしのび盗へけ二いろの盗の罪科。故火人とハ今云火つけ。是ハ法民の要事をこゝのるなり

右既有断罪之先例何及

猶預之新議
哉

次放火人事。
准據盜賊法
令禁遏

一 密懐他人
妻罪科事

右不論強姦

非緣之新議哉

放火人事准據盜賊法
令禁遏

放火人ハ盜賊ニ准據シ禁遏ノ義アルヘシ

一密懐他人妻罪科事

他ノ人ノ妻ヲ密懐スル罪科事

右不論強姦和奸懐抱人

和奸。懐抱人
妻之輩被名
所須半分可
被罷出仕。無
所帯者可處
遠流也。女之
所領同可被
名之。無所須
者又可被配
流之也

妻ヲ密懐スル輩ハ半分可
罷出仕。和奸者ハ可
遠流也。女之所領同可
名之。無所須者又可配
流之也

如ノ男ハ犯ヲ合点シテ犯ヲ犯ス。
ハ和奸ト別ナリ。他ノ妻懐抱リノハ知ルヲ以テ仕ヲ
ル。知ルヲ以テハ流サルベシ。女モ知ルヲ以テ仕ヲ
ルヨリ。男ト女ト別ク流ヲ云ハ
ル。配流ハ流罪ヨリ軽シ云ヘ
流刑ト配流トハ異ナリ

次於道路辻捕女事於御家人者百箇日之間可止出仕

到郎従以下。任右大将家御時之例可剃除片方之鬢髮也

但於法師之罪科者當其時可被斟酌

一雖給度ヒ名文不參上科事

右就訴状遣

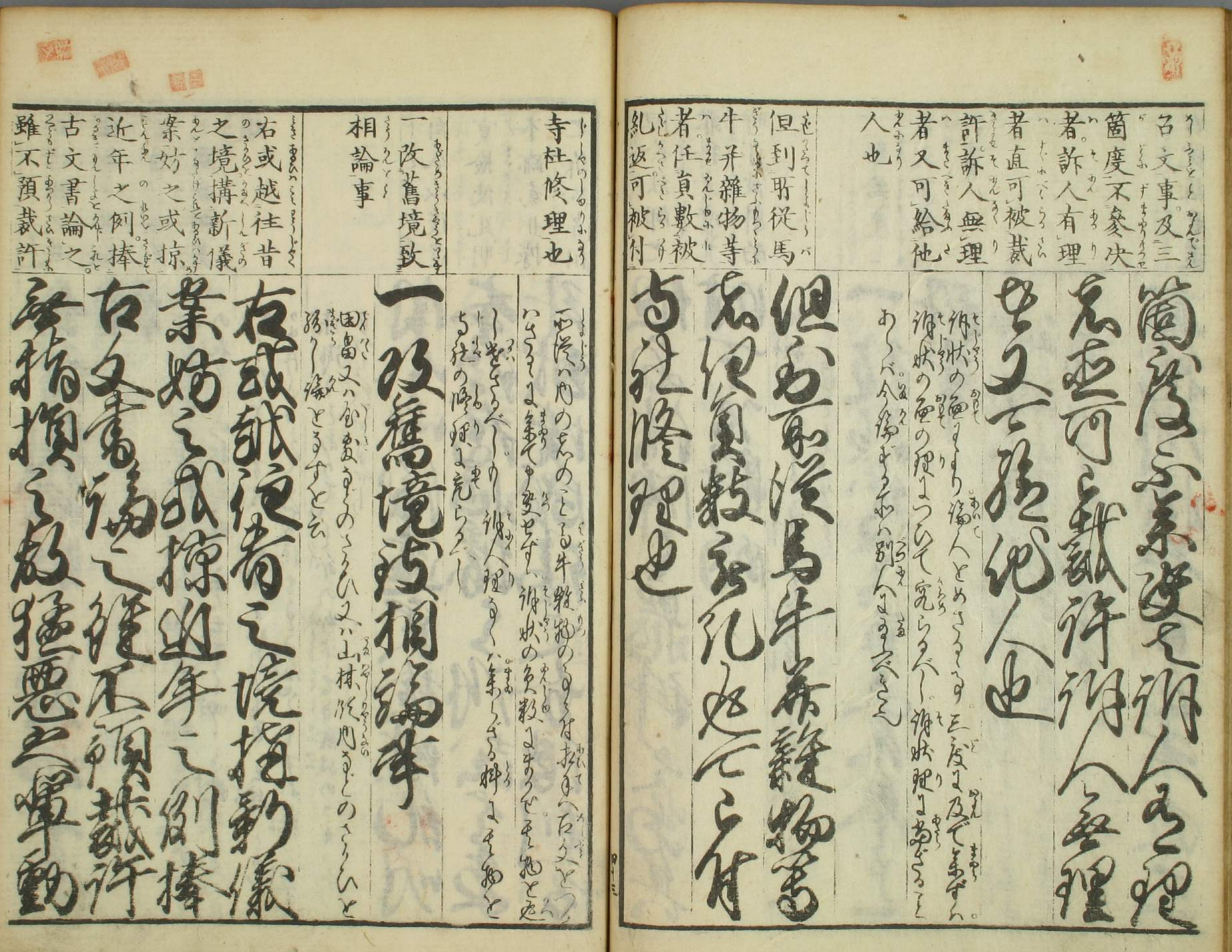
名文事。及三箇度不參決者。訴人有理者直可被裁許。訴人無理者又可給他人也

但到所從馬牛并雜物等者任員數被紀返可被付

寺社修理也

一改舊境致相論事

右或越往昔之境構新儀業妨之或掠近年之例捧古文書論之雖不預裁許

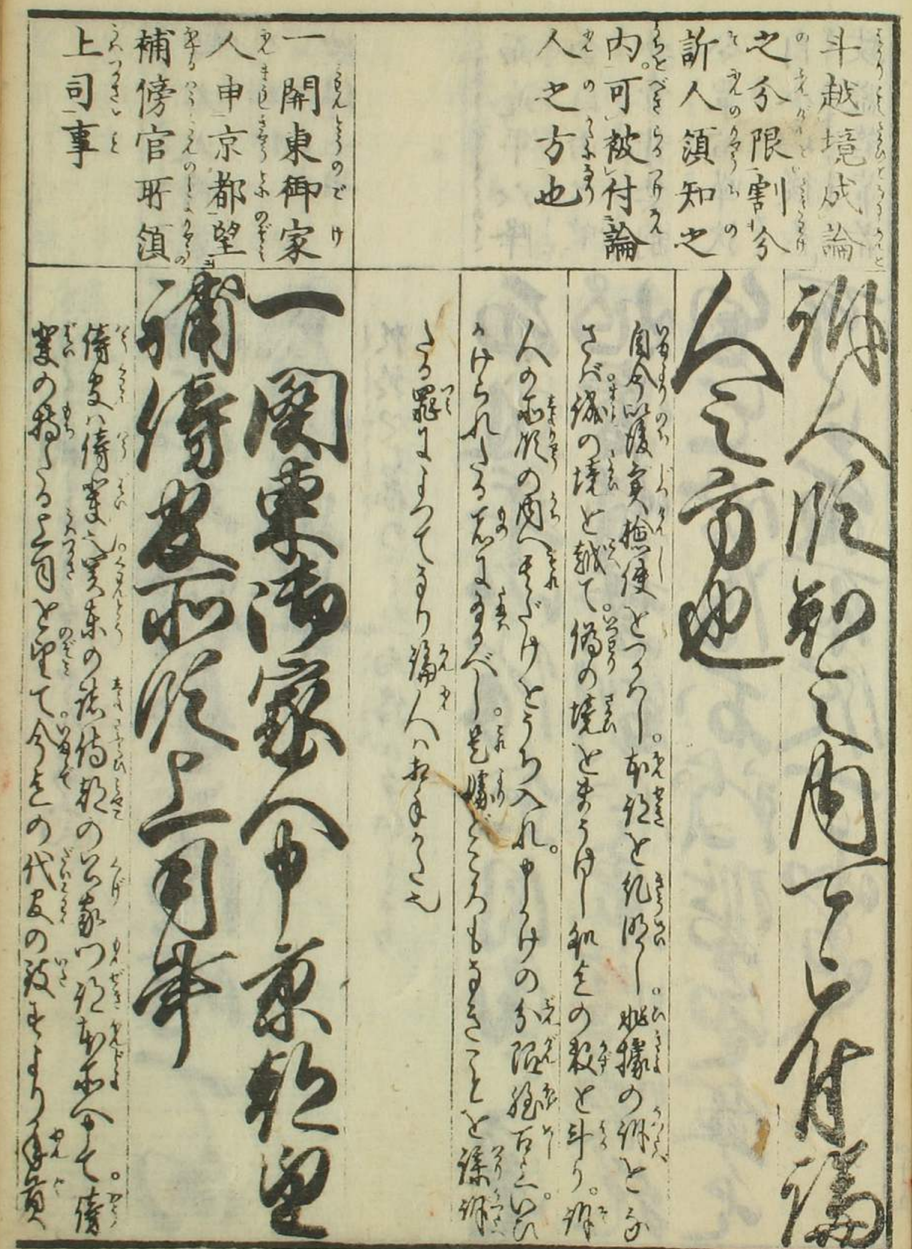


無指損之故
猛悪之輩動
企謀訴成敗
之處非無其
煩

自今以後遣
實検使糺明
本跡有非據
之訴訟者相

斗越境成論
之分限割分
訴人須知之
内可被付論
人之方也

一開東御家
人申京都望
補傍官所領
上司事



右大将家之御時一向被停止畢

而近年以降企自由之望非啻背禁制令覃喧嘩欲自今以後於致濫望輩者

可被召所領一所也

一惣地頭押妨所領内名主職事

右給惣領之人称所領内掠領各別村事所行企難

道罪科爰給
別御下文雖
為名主職惣
地頭若伺歴
弱之隙有限
沙汰之外巧
非法致盤妨
者可給別納
御下文於名
主也又寄事
於左右不顧
先例違背地

為名主職惣地頭若伺歴弱之隙有限沙汰之外巧非法致盤妨者可給別納御下文於名主也又寄事於左右不顧先例違背地頭者可被改名主職也

頭者可被改
名主職也

一官爵所望
之輩申請関
東御一行事

一官爵所望之輩申請関東御一行事

右被召成功之時被注申所望人者既是公平也依非沙汰之限為昇進申聚状事不論貴賤一向可停止之

右被成功之時被注申所望人者既是公平也依非沙汰之限為昇進申聚状事不論貴賤一向可停止之

功と成て支住とすべきと。そのうち陸奥と書て支住と陸奥と書べきと。そのうち陸奥と書て支住と出すべきと。やむもつとも。しかれども。四条の式目より。つくる。是実朝の式目なるべきよしそ平よしれるとこゝろ。四条の式目よりはじめて。四条の式目なるべきよしそ平よりなどとそり。昇をいう支住とのゝりすべし。考べし。

但申受領検非違使之輩。於為理運者雖非御聚状。只有御免之由可被仰下歟

但申受領検非違使之輩。於為理運者雖非御聚状。只有御免之由可被仰下歟

支住とすべきのるべ。検非違使と。検校とる使とべ。料人と陸奥支住。四条の式目なるべき理運よりのべ。四条の式目なるべ。遠死わるべ。死とすべ。死とすべ。

蚤又新叙之輩迎年過来

蚤又新叙之輩迎年過来

輩。巡年廻来浴朝恩者。非制限

一鍾倉中之僧徒恣諍官位事

右依綱位乱

浴朝恩者非制限

一鍾倉中之僧徒恣諍官位事

右依綱位乱鶴次之故猥求自由之昇進彌添僧綱之貪數

鶴次之故猥求自由之昇進彌添僧綱之貪數

雖為宿老有智高僧被越少年無才之

雖為宿老有智高僧被越少年無才之

後輩即是且傾衣鉢之資且乖經教之儀者也

自今以後不蒙免許昇進之輩為寺杜供僧者可被停廢彼職也

雖為御歸依僧同以可被停止之

此外禪侶者偏仰顧眄之人宜有諷諫之誡

一奴婢雜人

之事

右任右大將家御時之例
無其沙汰過
十箇年者不及
論理非不及
改沙汰

次奴婢所生

奴婢とゝしをへぬ輩人とゝ

右任右大將家御時之例
無其沙汰過十箇年者不
論理非不及改沙汰

次奴婢所生男女事

之男女事

如法意者雖
有子細任同
御時之例男
者付父女者
可付母也

如法意者雖有子細任同
御時之例男者付父女者
可付母也

法ハ古法ノ心ニ有ルカ故ノ心時ノ例ニ
ノ例ニ男女ノ子ハ父ノ子ニ
ルベシ男ハ父ニ付ケ女ハ母ニ
ルベシ子細ハ任同ノ例ニ
ルベシ

一百姓逃散

一百姓逃散時孫逃散令

時称逃散令損亡事

右諸國住民逃脱之時其領主等称逃毀抑留妻子奪取資財所行之企甚背仁政若有名目者年貢所當未濟者可致其償不然者早可被糺返損物但於去留者宜任民意也

一 称當知行

損亡事

農民は勝手の課役をうけざるゆゑ百姓ひそかに逃散し其あとにのこれる婦女あるひはおさなきものゝ民の竈にとゞまりゐるを逃毀といふ

右諸國住民逃脱之時其領主等称逃毀抑留妻子奪取資財所行之企甚背仁政若有名目者年貢所當未濟之分致其償

逃脱はおのがのがるゝ逃毀はにげたる者どもの抑留はおさへとゞむ資財は資具器財本文の詳はまむなしく百姓の地及百姓ども其年貢未進あらば其償すべし。もし年貢未進なくは糺返し損物を返すべし。民の去るも地にとゞまるも民の心にまかすべし。逃散の者は地及田畑をあらし其課役をつとむる事なし。農民の逃散するは其科なり。

不然者早可糺返損物但於去留者宜任民意也

一 称當知行掠領他人知

掠給他人所領。貪取所出物事

右構無實掠領事式目所推難脫罪科。仍於押領物者早可令糺返。至所領者可被没收也。

他人の所領と私知行と云掠め無實とうあ人押領する後武用の法と推しのがれ難しもし人の所領と没收でもるべし。知行するものは流罪

無所領者可被處遠流

次以當知行所領。無指次申給安堵御下文事。若其次始致私曲歟。自今以後可被停止

次に當知行所領無指次申給安堵の御下文事若其次始致私曲歟自今以後可被停止

一傍輩罪科未斷以前競望彼所帯支

右積勞効之輩企所望者常習也而有所犯之由令風聞之時罪状未定之処為望件之所領欲申沈其人之条所為之旨敢非正義

就彼申状有其沙汰者虎口之讒言蜂起不可絶欲假使雖為理運訴訟不被叙用兼日之

一傍輩罪科未斷以前競望彼所帯支

傍輩の中に科ありていまだ罪科もさだまらざる前に競望のことをいふ

右積勞効之輩企所望者常習也而有所犯之由令風聞之時罪状未定之処為望件之所領欲申沈其人之条所為之旨敢非正義

勞効いさをの輩と訓す。勞効と励すこと。所犯と犯す人のことなり。罪状と罪の定まらざるを云ふ。欲申沈と沈むとは沈んとなり。所為と為は為の字。敢非正義の非は人偏の非にて義と失人の義とは別なり

就彼申状有其沙汰者虎口之讒言蜂起不可絶欲假使雖為理運訴訟不被叙用兼日之讒言

叙用とは沈んと沈めても彼知らんと申すなんと張人の申す事なり。その犯科の旨を糾さんとすれば。その後の申

競望

一罪過之由披露時不被糺決改替所職事

右無糺決之儀有御成敗者不論犯否定貽讐憤歟

一罪過之由披露時不被糺決改替所職事

右無糺決之儀有御成敗者不論犯否定貽讐憤歟

者早究淵底可被禁斷

一所領得替時前司新司沙汰事

右於所當年貢者可為新司之成敗至

一所領得替時前司新司沙汰事

右於所當年貢者可為新司之成敗至

私物雑具并所従馬牛才者新司不及抑留況令輿恥辱於前司者可被處別過怠也

但依重科被没収者非沙汰限

一以不知行所須文書寄附他人事

付名主職不論本所寄進権門事

右自今以後

一私物雑具并所従馬牛才者新司不及抑留況令輿恥辱於前司者可被處別過怠也

但依重科被没収者非沙汰限

一以不知行所須文書寄附他人事

付名主職不論本所寄進権門事

右自今以後

第四条 重科 あつて没収せらるる物品 雑具以下とは、前司の私物雑具のことをいふ。

名主職不論本和 寄進権門事

名主職とは、本和寄進権門事とは、名主職の農民役を免ぜられべき本和寄進権門職とをいふ。

於寄附之輩
者可被追却
其身也至請
取之人者可
被付寺社修
理
次以名主職
不令知本所
寄附権門事
自然在之如

於寄附之輩者可被追却其身也至請
取之人者可被付寺社修
理

知行せざる所の書物などを他人に寄附する輩はその身を追却
せらるべし。請とりたる人は寺社の修理に付せらるべし

次以名主職不令知本所
寄附権門事自然在之如
此之族者名主職可被

此之族者名
名主職可被
付地頭與地
頭之所者可
被付本所
一 賣買所須
事
右以相傳之
私領要用之
時令沽却者

付地頭與地頭之所者可
被付本所

地頭は惣支配と知行のものゝ事なり。名主は…
本所は地頭の…職は同じ

一 賣買所須事

知行のうりかひをすることをいふ

右以相傳之私領要用之
時令沽却者[illegible]

定法也而或
募勲功或依
勤身預別御
恩之輩恣令
賣買之条所
行之旨非無
其科自今以
後慥可被停
止也

募勲功或依勤身預別御恩之輩恣令賣買之条所行之旨非無其科自今以後慥可被停止也

若又背制符
令沽却者云
賣人云買人
共以可被處
罪科

若又背制符令沽却者云賣人云買人共以可被處罪科

一兩方證文
理非顯然時
擬遂對決事

一兩方證文理非顯然時擬遂對決事

双方の証拠文の旨理非顯然の時は若くは雖云と云て理と仕るべきもわゝん見物を指をんと思ひ財多と一

右彼此證文理非懸隔之時雖不遂對決直可有成敗欤

一狼藉時不知子細出向其庭者事

右於同意與力之科者不及子細至其輕重者無難定式條尤可依時宜欤

為聞實否不知子細出向其庭者不及

罪科

一帯問状御教書。致狼藉事

右就訴状被下問状者定例也。而以問状致狼藉事、

一帯問状御教書致狼藉事

右就訴状被下問状者定例也。而以問状致狼藉事、

新盗之企難遁罪科。所申為頭状之僻事。一切可被停止

支者。給問状

起請　御評定間理非決断事

起請　御評定間理非決断事

右愚暗之身。依了見之不及若旨趣相違事。更非心之所曲。其外或為人之方人乍知道理之旨。称申無之旨。称申無理之由。又為非濛事号有證跡為不顕人之短乍令

右愚暗之身依了見之不及若旨趣相違事更非心之所曲其外或為人之方人乍知道理之旨称申無理之由又為非濛事号有證跡為不顕人之短乍令

知子細付善悪不申之者意与事相違。後日之訛謬出来欤。凡評定之間於理非者。不可有親疎。可有好悪。只道理所推。心中之存知。不憚傍輩。不恐權門

出来欤。凡評定之間於理非者不可有親疎可有好悪只道理所推心中之存知不憚傍輩不恐權門

可出詞也御
成敗之事切
之條ヒ。殺雖
不違道理一
同之憲法也
誤雖被行非
據一同之越
度也自今以
後相向訴人
并其緣者自
身者雖存道
理傍輩之中

以其人說致
違乱之由有
其聞者已非
一味之義殆
黙諸人之朝
者欺義又依
無道理評定
之庭被弃置
之輩越訴之
時評定衆之
中被書与一
行者自餘之

討諸人之由獨仏法
之衆之條之子細如此
雖爲一事有曲折令違犯
之人

梵天帝釋四大天王摠日
本國中六十餘州大小神
祇殊願仰願冥顯權現
三島大明神八幡大菩薩

計皆無道之
由獨以被存
之次者條々
子細如此若
雖爲一事存
曲折令違犯
者
梵天帝釋四
大天王惣日
本國中六十
餘州大小神
祇殊伊豆箱

天満大自在天神部類眷
属神罰冥罰各可罷蒙者
也仍起請如件
貞永元年七月十日

齋藤兵衛入道 沙弥 浄円
佐藤 相模大掾藤原業時
太田 玄蕃允三善康連
後藤 佐渡守藤原基綱

根両所權現
三島大明神
八幡大菩薩
天満大自在
天神部類眷
属神罰冥罰
各可罷蒙者
也仍起請如
件
貞永元年七
月十日

二階堂民部大夫 沙弥 行然
矢野外記大夫 散位三善朝臣倫重
加賀守三善朝臣康俊
二階堂隠岐入道 沙弥 行西
中條 前出羽守藤原朝臣家長
三浦 駿河守平朝臣義村
摂津守中原朝臣師員
北條 武蔵守平朝臣泰時

齋藤兵衛入道沙彌浄圓

佐藤相摸大椽藤原業時

太田女番允三善康連

後藤左衛門尉藤原朝臣基

北條

相模守平朝臣長時

○起請ハ起て[illegible]

[illegible]

綱

二階堂民部大夫沙彌行然

矢野外記大夫散位三善朝臣倫重

加賀守三善朝臣康長

二階堂隠岐

[illegible]

○梵天帝釈と云[illegible]

[illegible]

入道　沙彌
行西
中條　前出
羽守藤原
朝臣家長
三浦　前駿
河守平朝
臣義村
攝津守中
原朝臣郎
員
北條　武藏

守平朝臣
泰時
北條　相模
守平朝臣
時房

[illegible]

文政十年丁亥二月下旬　高井蘭山

玉巖堂藏版目録

東都兩國
横山町三丁目　和泉屋金右衛門

梧窓漫筆　錦城太田先生著　全三冊

先生平日隨筆剖記ノ書也古今治乱ノ本原ノ推ミ風俗政教ノ隆ノ衰ル所ヲ論シ博ク經傳子史ノ諸ヲ証シ又學術ノ邪正ノ辨ジ天人ノ秘蘊ヲ漏ス實ニ天下有用ノ珍編ト云ヘシ

同後編　同上　全二冊

前編ニ漏レタル妙論ヲ載セ又經學詩文ノ流派ヲ辨別シテ其精確ヲ極ム前編ト同ク双璧ノ書ナリ

同二編　同上　全二冊

向者刊行スル此書前後編四冊盛ニ世ニ行ハレ一ト二ニ購ヒ人毎ニ繙テ古今ノ事理ヲ通曉ス今此篇ハ彼四冊ニ漏レ名儒事異説ヲ湊合シ全篇ノ鴻寶トス

農家調寶記　高井蘭山著　全三冊

[illegible]

農家用文章大全　同上　一冊

用文章の書[illegible]
[illegible]
[illegible]

梧坡教諭　錦城先生附言　全二冊
堯民先生著
此教諭武ノ意ヲ記シテ学ノ故事古書ヲ
ドテ記シタル梧窓漫筆類ニテ又別ニ梗
経ニ開ケタル珍書ナリ

朱子家訓經典餘師　齊田先生述　全一冊
此書ハ南宋の名儒朱熹先生平生子弟ニ
導ケラレシ一家ノ教ヘ倫ノ道ト
ハ常ノ理ト述ラレシ右ノ
ヘト齊ラ最一の書ニ今ヨリ字ヲ書
小和解ニ士農工商ノ職業
使ク尽ス理ト含潤シテ家ヲ斉ヘ
子孫長久繁昌ス基ナリ

笑戲自知録　伴田陳人著　全二冊
此書ハ学ヒトヅサ人ハ半ラハ
吾ノ秘訣ハ又ハ象棋ト車ノ
ノ得ハ人ハ一ノ宝ト
戯神戯説ト云シテ一ノ
面白ク書ナリ

除蝗錄　大藤永常著　全一冊
此書ハ稲ノ害ノ蝗ヲ除
シテ田畑ノ如ク害ヲ防ク数ト
カ長ハ巻和古ニ一ト
ヨクヘ書ナリ

野総茗話　常盤潭北著　全五冊
此書ハ父子夫婦ノ汎ク
儒仏ノ大義ヲ論
ヨクヘ知ル書ナリ

秘法金寶記　山西雲
此書ハ病人ノ平生ノ
秘法ノ右ノ
ノ途中ノ意
ヒ敬ヒ
浦ノ年
ヒ人ノ
ヒ日用ノ要有ル
ヒ白ク書ナリ

三都書物問屋

京都寺町通松原下ル町　勝村治右衛門
大坂心齋橋通北久太郎町　河内屋喜兵衛
江戸日本橋通一丁目　須原屋茂兵衛
同　浅草茅町二丁目　須原屋伊八
同　日本橋通二丁目　須原屋新兵衛
同　所　山城屋佐兵衛
同　芝神明前　岡田屋嘉七
同　本石町十軒店　英屋大助
同　浅草廣徳寺前　和泉屋庄治郎
同　横山町三丁目　和泉屋金右衛門